

令和2年度「学生による社会スタディ」開催報告

公益社団法人 私立大学情報教育協会

本年度は、新型コロナウイルス感染症防止のため、「オンラインによるテレビ会議形式（Zoom使用）」で開催を計画し参加を呼びかけたところ、「気づきの整理と発展のためのグループ討議」を含む「全プログラム参加者」が37大学72名、「有識者の情報提供と質疑応答・意見交換」のみに参加の「情報提供のみ参加者」が27大学67名で合計139名が参加した。以下に概要を報告する。

1. 開催目的

全国の国・公・私立大学の1・2年生を対象に情報通信技術を活用した新しい価値の創出の重要性に気づいていただき、早い段階から発展的な学びが展開できることを支援することを目的に実施した。

2. 開催日時・場所

日時：令和3年2月5日（金）に「オンラインによるテレビ会議形式（Zoom使用）」で開催した。

3. 参加者

「全プログラム参加者」が37大学72名、「情報提供のみ参加者」が27大学67名で合計139名が参加した。

4. 参加者の内容

(1) 全プログラム参加者

参加者は37大学72名、1年生42%、2年生58%、男性53%、女性47%、学部別では情報・理工系学部18%、経済・経営32%、家政系3%、人文社会系33%、法学系11%などであった。

(2) 情報提供のみ参加者

参加は27大学67名、1年生31%、2年生69%、男性52%、女性48%、学部別では情報・理工系学部10%、経済・経営6%、メディア系25%、家政系3%、人文社会系46%、法学系8%、などであった。

5. プログラム概要

12:00	12:00~12:30 受付開始
12:30	開会挨拶
12:35	社会スタディの進め方について
12:50	1. 有識者からの情報提供、質疑応答、補足説明 (1) 未来は君たちの手にある「AIと社会イノベーション」 須藤 修 氏（中央大学国際情報学部教授、東京大学大学院情報学環特任教授） 地球的規模で大変動が起きようとしている。AIの利用は自由、尊厳、平等、安全性や持続可能性の向上など「人間中心の社会原則」の尊厳が極めて重要である。これからの社会に必要なのは、AIを正しく利用できる素養・知識・倫理を持つことである。未来は君たちの手にあるので、文理の境界を超え、新しい社会の創造に向けたスキルの習得や社会的実践を通じて「AIに負けない叡智」を培ってほしい。
13:45	(休憩) 13:45~13:55 (10分)
13:55	(2) デジタル・トランスフォーメーションによる価値創造 小西 一有 氏（合同会社タッチコア代表、九州工業大学客員教授） グローバルなデジタル変革の中で成長し発展していくには、新たな価値を生み出す様々なイノベーションが求められる。今まで日本が得意としてきた「問題解決のイノベーション」だけでなく、「モノからコト」へのような人々の生活の豊かさや幸せ感をもたらす「意味のイノベーション」が避けられなくなっている。新しい価値を創り出し、成功していくには、経験するという価値に気づき、永く愛される商品やサービスの創造にチャレンジしてほしい。
14:50	(3) 超スマート社会で求められる学び 大原 茂之 氏（東海大学名誉教授、株式会社オプテック会長） 世界の中で日本の競争力ランキングは30年前の1位から現在の34位まで下がっている。その要因の一つとして、デジタル社会の中で、「自分でアイデアを生み出し」、「社会の変化を受け止め」、「解決に意欲を持つ」人材が育成されていないことが指摘されている。知識の量や与えられた課題をこなす能力ではAIに勝てない。サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を組み合わせる自分たちの解を模索する思考力・創造力・実践力を身に付け、社会を変えていくことが求められる。
15:45	(休憩) 15:45~15:55 (10分)
15:55	2. 気づきの整理と発展のためのグループ討議 ※ グループで「情報通信技術を活かして未来社会にどのように向きあうか」について考える。
17:15	3. 気づきの発表 ※ グループごとにまとめた結果を代表者が発表する。
17:30	閉会挨拶

6. 有識者からの情報提供の概要

(1) 未来は君たちの手にある「AI と社会イノベーション」

須藤 修 氏 (中央大学国際情報学部教授、東京大学大学院学環特任教授)

AI、IoT、ビッグデータ、5G、量子技術などの進展は世界の社会・産業構造に革新的なパラダイムシフトと激しい競争をもたらし、今まさに「デジタル革命」の真っただ中にある。

しかし、日本は先進国に比べ制度・織改革の遅れ、紙文化中心、データの正規化・欠損対策の遅れなどが遅れておりこの取組みが喫緊の課題となっている。

Society5.0に向けた日本のAI戦略では、AIの利用は自由、尊厳、平等、安全性及び持続可能性の向上など「人間中心の社会原則」を尊厳することが極めて重要であるとし、AIは「人間の代替」ではなく人間の「能力拡張」を目指すものとしている。これから必要なのはAIを正しく利用できる素養・知識・倫理を持つことである。君たち若者はDX、そして新たな社会創造の担い手である。未来は君たちの手にあるので、勇気をもってチャレンジして欲しいことが紹介された。

 [情報提供資料](#)



(2) 「価値を創り出すイノベーションとは」

小西 一有 氏 (合同会社タッチコア 代表 九州工業大学 客員教授)

今まで日本が得意としてきた「問題解決のイノベーション」では、グローバルなデジタル変革の中で成長し発展することは難しく、「モノからコト」へのような人々生活の豊かさや幸せをもたらす「意味のイノベーション」で新しい価値を創造することが不可欠となっている。これを加速しているのが、デジタル化とデジタル・トランスフォーメーションである。例えば、ロウソクは「暗いところを明るくする」ものであったが、「癒し」、「疲労回復」、「明日への活力」など全く新しい価値を創造した。これが「意味のイノベーション」であり、グローバル社会で成功するためにはユーザー中心の急進的イノベーションが不可欠になる。これからのビジネス社会で、新しい価値を創り出し、成功していくために、経験するという価値に気づき、永く愛される商品やサービスの創造に向けて創造性、マネジメント能力、学び続ける精神を持ってチャレンジしてほしいことが紹介された。

 [情報提供資料](#)



(3) 超スマート社会で求められる学び

大原 茂之 氏 (東海大学名誉教授、株式会社オプテック会長)

日本の国際競争力は1989年の世界第1位から2019年の第34位まで急激に低下しており、これを逆転して成長に結び付けるため、経済活動を始めとするあらゆる面で新しい価値を創造し、社会の仕組みを変革するイノベーションによる創造的破壊が求められている。このような取り組みの一例として、電気自動車では、完全自動化、低炭素化、交通事故ゼロ化など多くの「新たな価値を創出」している。このイノベーションには、設計・デザイン、製造、販売、交通法規、流通などを中心に「情報、政治、経済、経営、法律、芸術、工学、化学」など幅広い分野でイノベーションを推進する人達が求められる。これから必要なのは、Zero to One (自分で問題・種を発見・構想し、新しい価値に結びつけることができる人)とOne to Hundred (提示された新しい問題・種を育成・成長させられる人)であり解答例を見て安心する習慣では生き残れないので、環境を客観的に観察し、自分で考え、問題を発見・構想する素養を身に付けてほしいことが紹介された。

 [情報提供資料](#)



7. 気づきの整理と発展

質疑応答では、自分の意見をもって批判的に捉える学生の質問も多く見られ、参加学生の高い意識が確認された。

気づきの整理と発展では、6名×15グループを編成し、「未来社会にどのように向き合うか」について、オンラインでグループ討議を実施した。

どのグループも熱心に議論が交わされており、最後に各グループから1分程度発表させたところ、「解と共同性が求められる現状を脱却し失敗を恐れず自分の考えをもってチャレンジする必要性を強く感じた」、「分野や性別にとらわれず自分で考え未知の世界にZero to Oneで取り組むアントレプレナーシップの重要性に気付いた」、「これからは文系でもAIやIoT、データサイエンスの基礎知識が不可欠になることが理解できた」、「デジタル化、DX、意味のイノベーションなどの意味が理解できた」、「先入観に囚われず、若者が率先してデジタル社会の変化に対応していくべきと感じた」などの感想が発表された。



【気づきの整理と発展・発表の一例】

8. 学びの成果の確認について

参加者139名の内63名(参加者の45%)から「学びの成果報告書」の提出があり、産学連携プロジェクト推進委員会で審査し、3月末に56名に「修了証」を郵送した。また、特に優れた成果が見られた7名には3月末に「優秀証」を発行し所属大学の学長に報告した。